

学習院大学 海外協力研修プログラム

DISSOLVA

ボルネオプロジェクト

研究報告論文集

2023年度

学習院大学海外協力研修プログラム

DISSOLVA

ボルネオプロジェクト

研究報告論文集

2023 年度



目次

コミュニティーの中心、生物文化遺産の家への愛着と責任	武田佳耶乃	5
ブアイヤン村でのハリナシミツバチの養蜂の効果について	齋藤琴春	9
ブアイヤン村の地理的環境と洪水対策プロジェクトの提案	鈴木琉生	13
ブアイヤン村の結婚観と家族観——お年寄りから若者まで	平野智紗	17
第二次世界大戦期ボルネオ——サンダカン死の行進をめぐって	張ミン赫	22

トケコム Vol.6
学習院大学海外協力研修プログラム
DISSOLVA
ボルネオプロジェクト
活動報告書兼研究報告論文集

2024年2月20日発行

Edited by
Shuhei Momiyama and Yu Nakamura

Sponsored by
Gakushuin University International Exchange Fund
Shoyu Club International Exchange Fund

Designed by
Hasegawa Design Office

Printed by
Evis Systems co., ltd.

はしがき

ブアイヤン村再訪——新型コロナウイルスの拡大防止のため、海外渡航が自粛されるなか、3年間にわたりオンラインのみの支援活動を続けてきました。そして今年はいよいよ海外渡航が解禁される中で、かつて学習院大学の先輩たちが現地活動で訪れたボルネオ島の山村に再度訪れ、ボランティア活動をすることが可能になりました。再び、かつてのような現地活動をするに、どのような意味があるだろうかと学生たちと考え続けながら、活動してきました。高校や大学で制限の中で学生生活を過ごしてきた学生たちにとっては、はじめて海外に出てマスクもせず自分の生身の体だけで、大自然の中にとけこみ、熱帯雨林の山村の方々とふれあい、存分に自由と温かさを満喫できる機会です。コロナ前の先輩たちは、どれほどまでに人間らしい体験をしてきていたのか、自分たちもまたそこまでの体験ができるだろうかと期待が膨らみました。今年はこのように、何がコロナ前は可能であって、果たして今も可能なかどうかを確認する旅となりました。そして、コロナ禍の最中にオンラインで経験してきたことを、またダイレクトに現地での活動に役立て、揺るぎない生の体験へと転換させていくことのできる貴重な機会をいただくこととなりました。

学習院大学海外協力研修プログラムDISSOLVAボルネオプロジェクトは、合計5回の現地渡航を国際交流特別事業として実施してきました。その後、2017～18年はミニプログラムを行い、2020～22年はオンラインプログラムを続けました。当初から、グローバル経済発展の歴史と発展の中で失われてきたもの、そして未来に生かすことのできる先人の知恵や工夫をテーマにして、卒業論文を執筆することを最終目標にし、現に経済成長の影響で社会・文化・環境の各方面で多くの変化が引き起こされている農村部を見据えてまいりました。コロナ禍の最中には、現地マレーシア・サバ州で、これまで食糧輸入に頼ってきた経済発展が、米の輸入の停止によって混乱をきたす状況に直面していました。自然豊かで、食物になる動植物が何でも豊富にあるボルネオ島で、何故いとも簡単に食糧危機が迫ったのだろうか。サバ州の農業は、そして米生産は、どうなっているのだろうか。新たな疑問や研究視角もまた、今年度のプロジェクトを構想する中で生まれてきました。

プロジェクト参加者の公募は4-5月に行われ、経済学部だけでなく理学部、文学部、国際社会学部からも、経済発展とボルネオの大自然や先住民の暮らしに対してしっかりとした考え方を持った参加学生たちを、迎え入れることができました。参加学生たちとの本格的な活動開始は、5月末の現地視察と重なり、ブアイヤン村からのオンライン中継でした。マレーシア・サバ州は米の収穫を祝うカーマタン祭りの最中で、教育機関も休みであったために、この時期の現地視察には現地の中学生や高校生、そしてマレーシア・サバ大学で歴史学修士号を取得したのちに小学校教諭をしているイメルダ・タンバヤンさんが同行してくださいました。ブアイヤン村からの中継は、コロナ禍の最中にオンラインで全面改修作業を支援し、屋根も床も柱も一新された「生物文化遺産の家」から配信され、綺麗になった建物の様子や、全面改修作業に向けて伐採された大木の代わりに植樹されたフルーツの木の成長ぶりを、学生たちにも見せることができました。今年度のプロジェクトでは、これらフルーツの木に加えて、荒地と化してしまった建物周辺の敷地を環境教育に資する「プロジェクトガーデン」として、5つのプロジェクト案に基づきデザインし直すこととなりました。

5つのプロジェクトは、当初の構想段階では水害予防のフタバガキ林での植樹作業と生物文化遺

産の家のバンブーデッキ建設作業を含むものでした。しかし、現地でのプロジェクト準備の進展具合と現地渡航時の作業場所の集中と簡便化も考慮して、学生たちの中から発案された「レインガーデンプロジェクト」へと入念な協議の末、変更されました。5つのプロジェクトは、稲作、養蜂、堆肥化、植樹植栽、利水の5つのポイントに絞り込まれ、有機的に繋がる一連のプロジェクトとして構想できるものになりました。各プロジェクトにはプロジェクトリーダーが立てられ、現地指導員への質問やインタビューで先頭に立ち、仲間の参加者へと新たな知見を伝え、帰国後はインタビュー動画の編集やポスター発表を行って、現地での学びをしっかりと自分のなかに根づかせられるように工夫しました。この現地研究調査体験が卒業論文執筆へとつながるのです。現地指導員としてお招きしたのは、サバ州北部のキナバル山西麓にあるティヌハン村の方々でした。現地視察の際に依頼をし、プアイヤン村入村前に学生たちもティヌハン村を訪問して事前研修を受けさせていただきました。プロジェクトパディというグループの方々が、稲作、養蜂、堆肥化のご指導をくださいました。植樹植栽と利水は、プアイヤン村の若者たちが村の伝統的な知恵を生かして、直接指導してくれました。そこに学生たちから日本での施工事例（川崎市の例、山中工務店の例など）をもとに発案されたアイデアもうまく生かされることになりました。

現地でのプロジェクトの実施は、入念な下準備とコンセプトの伝達周知、そして作業当日の腕力に大きく左右されるものですが、一つ一つ初めてのプロジェクトで実験的にプアイヤン村固有の環境の中で手探りで行われたものであるため、完璧な仕上がりになることはないということはもちろん織り込み済みのことでした。しかしながら、渡航前からオンラインで現地と繋がりつつ、庭のデザインを現地の若者たちや学生たちがアイデアを出して共に考え、植栽に必要な砂利、小石、黒土、砂、そして数十種類の草花の苗を用意し、現地では、学生たちの考えたストーリーに基づき一人一役で大雨役、草花役、樹木役、微生物役、小石役などを演じて寸劇を上演し、庭園づくりのコンセプトを子どもたちや村の方々に伝え、その上で、作業当日は、想像していたよりもずっと重い黒土を運んで腰を痛めたり、小学生たちと共に一つ一つ苗を植えたりしながら、それぞれの段階で大きな学びを体いっぱい深める機会となりました。学生たちが体力の限界を感じる中で、代わりに、大きな穴を掘り、重い黒土を運んでくださった現地の逞しい若者たちに、この場を借りて感謝申し上げます。

本研究報告論文集では、コロナ禍も経て変化の途上にあるプアイヤン村の現状を見据え、生物文化遺産の家の建築と団欒のあり方の変化、生物文化遺産の家にも棲みつき人懐っこいハリナシミツバチとの共生、急速な土地利用の変化に伴う森林伐採で生じる水害の問題、若者の都市への流出によって変化する結婚観や家族観、そして私たち日本人との関わりがかつて戦時中にもどのようなものであったか、掘り下げて調査し、プアイヤン村滞在中にインタビューを行うことで考え方を共有しながら、最終的にまとめた中間発表論文を掲載します。パパール川流域地域は、ダム建設計画の候補地となってきましたが、2015年には国連ユネスコの人と生物圏保護地域に指定され、2018年の総選挙で与野党が逆転して、ダム問題は棚上げになりました。しかしながら、今年は再度ダム建設の機運が高まってきており、村の方々の不安感も高まりつつあります。自然保護と経済開発をバランス良く進めようとする願いは、届いているのでしょうか。今後も変わりゆくボルネオの自然の中で「今」に関わっていくことが、学生たちの主体性と洞察力を喚起していくことと信じています。

眞嶋史叙（学習院大学経済学部教授）

コミュニティの中心、生物文化遺産の家への愛着と責任

武田佳耶乃

1. はじめに

DISSOLVA では、2020年からオンライン上で生物文化遺産の家の修復活動を行ってきた。2022年から新たな段階へと進み、生物文化遺産の家の活用に向けたプロジェクトとしてリビングルームのレイアウトの考案を行った。生物文化遺産の家とは、2013年にDISSOLVA 学生とイギリスのエジンバラ大学の学生が村の方々と共同で建設した村のコミュニティホールのことである。レイアウトを考案する際に、生物文化遺産の家の目標として、「コミュニティの中心としてブアイヤン村の多くの方に利用してもらう」という目標を掲げた。そのためには、現地の方々が生物文化遺産の家に対して愛着を抱くこと、村の方だけではなく学生も建物に対する責任を持つことが重要であると考えた。活用に向け村の方々にとってどのようなデザインが馴染みやすく、積極的に利用してもらえるのかを何度も試行錯誤しながら考案した。また今回、生物文化遺産の家の設計に携わり建築現場の監督としてプロジェクトに参加していた現地の建築家のフィルザさんにインタビューをさせて頂いた。インタビューでは、ボルネオプロジェクトがはじまったきっかけや当時の状況、ボランティア活動を行う上で大切なことなどを中心に様々なお話を伺った。レイアウトの考案、現地の方へのインタビューを通してボランティア活動を行う中で生み出された“モノ”に対して愛着と責任を持つことの重要性を考えていきたい。

2. 修復活動の過程とレイアウト案

修復活動から新たな段階として、私は生物文化遺産の家のリビングルームのレイアウトの考案を行った。生物文化遺産の家は「コミュニティの中心としてブアイヤン村の多くの人に利用してもらう」ということを目標に修復作業を開始した。しかし、修復活動では屋根や床の張替え、雨水を溜める小規模なダムの建設など重労働が多かった。そのため力のある村の男性たちが主に作業を行っており、男女で生物文化遺産の家への関わり方に差ができてしまった。生物文化遺産の家を日常的に長く使ってもらうためには、男性にも女性にも建物への愛着を抱いてもらう必要があり、女性にも修復活動に関わってもらえる機会を設けることにした。そこで、ブアイヤン村の伝統工芸品である“竹編細工”を中心とした空間づくりを提案した。竹編細工は、建築作業と比較して力仕事ではないため女性でも簡単に制作することができる。また、近年ブアイヤン村では竹編細工を製作できる者が減少しているため、衰退の危機にある。竹編細工を中心とした空間にし、女性や若者たちに積極的に制作してもらうことで、プロジェクトへの女性参加と伝統工芸品の衰退を防ぐことができると考えた。この様な理由から、リビングルームには竹編細工を多く取り入れることにした。

生物文化遺産の家のリビングルームのレイアウトの初期デザインでは、団らんの場にするためにリビングの中心には円形のちゃぶ台を配置し、村の人たちが輪になって食卓を囲めるように考えた。また、木の床に直接座ると足が痛むため竹で編まれた座布団をテーブルの周りに配置する予定だった。天井には電球を取り付けるため、電球がむき出しにならないように竹編細工でランプシェイドを作成し電球を隠すことにした。現地の素材である竹や木材を多く使用することで、村の方に馴染みのある空間になるようにデザインをした。

しかし、この初期デザインでは非常に日本文化寄りのデザインであり、ブアイヤン村の人々には馴染みがなく、リラックスできる空間ではないという指摘を受けた。初期デザインのままでは生物文化遺産の家が村のコミュニティーの中心になれないだけでなく、村の方に利用されず、ただ建造物が建っているだけになってしまう可能性がある。初めに考えたデザインは、村の方が落ち着くような空間を想像しながら考案したが、ブアイヤン村の文化や実際の生活様式などに対する知識が乏しかったため、結果的に独りよがりなデザインになってしまった。

そこで、現地の方や現地をよく知るOGの方にブアイヤン村の生活様式についてのお話を伺った。ブアイヤン村では日本とは違い、テーブルに料理を並べ、椅子に座って食事をするという文化がない。床に座り、食器を床に並べて食事をする。そのため、テーブルや椅子がブアイヤン村の方たちにとっては不要なものであった。椅子とテーブルではなく、実際に村の方々が生活の中で使用している家具に変更する必要があると考えた。そこで、テーブルの代わりにコリントンを用いることにし、デザインの修正を行った。コリントンとは、竹編みで作られたザルの様なものである。主に、食事や料理の際などにお皿として使われることが多い。

まず、部屋の中心に大きなコリントンを配置する。このコリントンをテーブルのように中心に置くことで、自然と皆が円形に集まり団らん場として機能することを狙った。コリントンの周りには四角い木材を配置する。これは、椅子の代わりである。ブアイヤン村では、椅子に座るという文化がなく、長時間床に座る際には木材で作ったブロックを足に挟んで椅子として使用している。そのため、生物文化遺産の家にも木材のブロックを椅子の代わりに配置する。どちらも使用しない時は部屋の壁に立てかけたり積み上げたりして収納し、リビングルームのスペースを広く取れる様にする。また、ダイニングルームであるため木の食器棚も配置する。生物文化遺産の家は壁が無く開放的な空間になっており、雨で木が痛まないように柵の側面には竹を貼り付け補強する。天井には電球をぶら下げる。しかし、自然豊かな空間に電球がむき出しになっていると景観が損なわれる恐れがあるため、竹編みでランプシェードを作り電球を隠す。その他にも、星空をイメージした、竹編細工のセパタクロボールを作成し、天井に吊るす。セパタクロボールは村の方だけではなく学生も作成し、ブアイヤン村へ送り、学生も生物文化遺産の家やブアイヤン村に関われる機会にする。なぜ星空をイメージしたかという点、修復活動を開始した2020年から2022年はコロナ禍のため村の方々と直接交流をすることができず全てオンライン上での活動であった。そのため、ブアイヤン村と日本で離れていても同じ星空の下で繋がっているということを表現した。この様にして生物文化遺産の家のリビングルームのレイアウトが決定した。

初期のデザインでは、現地の生活とはかけ離れたデザインになり利用してもらえない可能性があったが、最終的なデザインでは現地の方にリラックスして頂ける空間にすることができた。また、巨大なコリントンやセパタクロボールを吊るす案は斬新さがあり、現地の方々に気に入って頂けた。12月に行われたゼミ合宿では東伊豆町を訪れ、東伊豆町の方とセパタクロボールを制作してブアイヤン村に送るというワークショップも開催し、東伊豆町の方にもブアイヤン村を知ってもらうきっかけを作ることができた。

何度も失敗を繰り返しながら最終的には現地の方々に満足して頂けるリビングルームを考案することができ、現地に関する知識が豊富な事も重要ではあるが、それ以上に失敗しながら現地の方と共に学んでいくことの方が重要であると感じた。豊富な知識によりこちらが一方向的に最適なデザインを提案しても、現地の方は気に入ってくれるかもしれないが建物に愛着を持つことはない。そのため、日常的かつ長期的な利用は難しい。しかし、現地の方の意見に耳を傾け何度も修正を繰り返し村の方と共にデザインした空間では現地の方も建物に対して愛着を抱き、長期的な利用に繋がる。ボランティアという

一方的な支援を想像されがちだが、現地の方々と試行錯誤を繰り返しながら共に学んでいくことが最も重要であると、この活動を通して改めて実感した。

3. フィルザさんへのインタビュー

リビングルームのレイアウトが決定し、完成した生物文化遺産の家の今後の利用について考えるために現地の建築家の方にインタビューを行った。今回は、生物文化遺産の家の設計者の一人で、現場監督を行ったフィルザさんにインタビューをさせていただいた。フィルザさんは現在、Arkitrek という社会貢献企業に勤めている。社会貢献企業とは、単に利益を求めるだけではなく、コミュニティに還元できるプロジェクトを行うことを目的とした活動を行う企業である。特に、高価である建築物に富裕層だけではなく貧困層の方たちも関わり、自分のものとしてできるようなプロジェクトを行っている。フィルザさんからは生物文化遺産の家建設当時の状況や、今後の DISSOLVA の活動に必要なことなどを中心に話していただいた。以下がそのインタビュー要約である。

きっかけについて：2012年にこの活動を始めた以前には GDF(Global Diversity Foundation) という NGO 団体と現地の若者が、現地の生物多様性・文化多様性を調べて報告書を書き、その資料を倉庫に保管・展示できる場所を作ることになった。Arkitrek に依頼が来て、海外の大学生たちとコラボし、コミュニティと一緒に参加する建築プロジェクトになり、英エジンバラ大学の建築学科の学生と学習院の学生が参加し、ブアイヤン村の方々と一緒に進めていくことになった。**デザインの意図について：**生物文化遺産の家の設計はエジンバラ大学の学生が行い、村の方たちの要望を聞いて設計した。村の方からもっと現地の素材を利用して建設してほしいと要望され、竹を使った床やパネルを取り入れた。空間としてはスマザオが踊れるステージや資料を展示するライブラリー、キッチンや食堂を作ってほしいと要望され、取り入れた。**修復の際のデザイン変更について：**デザイン自体の違いはなく、使用した素材が変更されたと思う。修復前はオンジュラインという自然にかえりやすい屋根素材や竹を使用した。当初から、川もあり湿気の多い場所だったので、もし村の人たちが気に入らなかった場合、使われないまま残り続ける建物よりは腐って無になる建物の方が Arkitrek の思想にも合っていて良いと思っていた。修復では、腐らない屋根素材や木の床に変更したというが、それは Arkitrek の思想に反することではなく、今度は村の人たちが自分たちの建築として所有権を明確に持ち、自分たちで守っていきたいという気持ちを持つようになったのだから、建築が進化していくことはとても良い。**建築ボランティアで最も大切なことについて：**一番大切なことは、元々のコンセプト、何のために何を作りたいのか、どういう目的があるのかを皆と共有すること。建物を作りながらデザインが変わるかもしれないが、その時はまず初心に戻って何の目的で何をしようと思っていたか、振り返るのが大切だと考える。コンセプトは建築家や建築家の卵の学生がやって来て、自分たちの作りたいものを押し付けるのではなく、コミュニティや使う人が何を欲しいと思っているか、そのイメージを大切にしながら取り組むことが必要だと考える。

今回、フィルザさんにインタビューさせて頂き、改めて生物文化遺産の家の存在意義について考えさせられた。建設当初は、時が経てば朽ちていく建物として建設されたが、私たちが修復活動をする際には、比較的腐敗しにくい素材へと変更した。フィルザさんのインタビューにあった様に、村の方が自分たちの建物であるという意識が芽生えた事による変化と前向きに考えることができるが、この先ただの木材の塊とならないように村の方々と、私達学生も建物に対する責任をより一層持ち、活動に取り組ん

でいくことが必要だと感じた。特に私たちは、建物の修復活動などが終了してもそのままブアイヤン村の方達と関わることを完全にやめてしまうのではなく、生物文化遺産の家と日本を繋いだZOOM上での交流会や、現地訪問など様々な角度から村の方々と関わる機会を常に作っていく事が大切である。また、これから先今回の活動のように生物文化遺産の家に新たに手を加える事になった際は、こちらが一方的にアイデアを押し付けるのではなく、提案したアイデアに対して村の方からフィードバックを頂いたり、村の方々の要望を聞いたりしながら一緒に作っていくことが重要であると感じた。

4. 最後に

生物文化遺産の家のリビングルームのレイアウトの考案やフィルザさんへのインタビューを通して、DISSOLVAの様なボランティア活動では特に以下の2点が重要であると感じた。

1点目は、現地の方々と一緒に試行錯誤しながら共に学んでいくことだ。生物文化遺産の家の様なコミュニティーハウスを建設する際には、現地に対する知識が豊富であることは大切な事ではあるが、ボランティアをする側が知識による最適なデザインを一方的に押し付ける行為は危険である。確かに、現地の方にとって最適なデザインは気に入ってもらえるかもしれないが、現地の方が建物に対する愛着を抱くことはない。その結果、木材の塊がその場にただ在るだけになってしまう。ボランティアとして現地の発展に向けて建物を建設したにもかかわらず、利用されなければ現地にゴミを置いてきたことになってしまい、活動の意味がない。一方で、現地の方に真摯に向き合い、何度も失敗を繰り返し、現地の方と共に学び成長しながら建設した建物は、愛着を持つことができる。そのため、完成した際の一時的なブームによる短期の利用ではなく、日常的かつ長期的な利用につなげることができる。だからこそ、ボランティアをする側、される側が共に試行錯誤し、学ぶことが重要である。

2点目は、建設活動が終了しても完全に関係を断ち切るのではなく、定期的に交流の場を設け、建物に対する責任を持ち続けることだ。ボランティア団体が現地に建築物を作る際、現地の方の中には外国人が建てていった物という意識を持ってしまう方も少なくない。そのような意識をもつ方々からすると、建物をどう利用すればいいのかわからなかったり、利用するきっかけが無かったりして結局使わなくなってしまう。しかし、交流の場を設けることで利用のきっかけを作ることができる。DISSOLVAでは、大学祭期間中に生物文化遺産の家に集まった現地の方とオンライン上でスポーツ大会や学習院大学の校舎紹介を行ったり、2月には活動報告会の中で食事会を開いたりした。催し物を開くことで、普段のミーティングに参加できない現地の方々が生物文化遺産の家を訪れるきっかけになり、建物の空間に慣れってもらうことができる。その結果、日常的な建物の利用に繋がる。これは、生物文化遺産の家だけに限らず全てのボランティア活動に当てはまる。プロジェクトが終了しても、定期的に現地の方々と交流をし、現地の状況把握や必要に応じて改善活動を行うこと。それこそが、建物に対する責任を持つということの真の意味である。建築物だけではなく、ボランティア活動で生み出されたモノは作って終わりではなく、そのモノが役目を終えるまで責任を持ち続けるべきであり、ボランティア活動を行う者の使命である。

生物文化遺産の家の修復活動やリビングルームの考案、フィルザさんのインタビューを通して上記2点が活動する上で最も重要であると感じた事だ。しかし、責任を持つという点には世代交代という課題がある。DISSOLVAでは、大学卒業により団体を編成する世代が変化していくため、生物文化遺産の家の修復作業を現地の方と共に経験した学生が今後ゼロになる時が来る。建物をただその場に在るだけの存在にしないためにも、生物文化遺産の家が役目を終える時まで、この活動の歴史を後輩たちに語り継いでいく必要がある。

ブアイヤン村でのハリナシミツバチの養蜂の効果について

齋藤琴春

1. はじめに

学習院大学海外協力研修プログラム DISSOLVA ボルネオプロジェクトでは、2012年度よりボルネオ島マレーシア・サバ州ピナンパン郡のブアイヤン村への支援を行ってきた。直接現地を訪れた際に村の方と共に建設した村のコミュニティホールである「生物文化遺産の家（通称Bio-budaya）」が大雨などの影響により屋根を中心に崩壊してしまったため、2020年度からはコロナウイルスの影響により現地には訪れることができない状況ではあったが、Zoomを用いたオンラインでの支援を行った。この「生物文化遺産の家」の修復作業が2022年春に終了したため、現在はブアイヤン村及び周辺の村の人々が「生物文化遺産の家」を積極的に利用してくださっている。また、「生物文化遺産の家」の庭のスペースの有意義な活用を目標に、村の方と共に新たなプロジェクトを考えている。私は、2022年の6月のゼミ合宿で訪れた静岡県賀茂郡東伊豆町のみかんワイナリーにおいて、それまで大量廃棄していたみかんをワインにし、商品化している工場を見学したことから、「価値化されていなかったものの製品化によって新たな産業を創出しよう」と学んだ。そして、それを応用し、ブアイヤン村においても、新たな収入源としてハリナシミツバチの養蜂を行い、プロポリス成分が多く、薬効が高いとされるハリナシミツバチのハチミツを瓶詰めして製品化することを考えた。

2. ハリナシミツバチとは

ハリナシミツバチとは、名前の通り、針を持っていないミツバチのことである。つまり、刺さないハチである。ミツバチ科に属するハチの仲間では、ハリナシバチとも呼ばれ、英語ではStingless Bee、マレーシア語ではKelulutと呼ばれている。世界中の熱帯・亜熱帯地域に400種以上生息しており、この種類の多さはミツバチ科で最大である。この400種類のうち、外敵に危害を加えない約30種が養蜂されている。ハリナシミツバチは、ニホンミツバチと同じように樹木や洞窟に巣を作る。また、巣ごとに女王蜂を中心とした社会を作り、植物から蜜を作り、巣の中に貯める。逆に、ニホンミツバチとの違いについては、蜂のサイズや飛行距離などが挙げられる。ニホンミツバチは体長12～13mmであるのに対して、ハリナシミツバチは体長3～10mmと、ニホンミツバチよりも小さい。また、ニホンミツバチの飛行距離は2000mだが、ハリナシミツバチはそれよりも短い500～1000mとなっている。さらに、彼らの巣についてはとても大きな違いがみられる。まずは、巣の形。ニホンミツバチの巣の形はセイウミツバチと同じように、六角形の形が隙間なく並んだ構造をして巣板を形成しているが、ハリナシミツバチの巣の形は楕円形で、口がすぼまっていて胴が膨らんだ形状をしており、それが螺旋状を描いて積み重なり並んでいる。巣の置き方にも違いがある。ニホンミツバチの巣は縦に巣板が垂れ下がる形で作られるのに対し、ハリナシミツバチの巣は螺旋状に上に積み重なっていくため水平に置いていく。巣の成分にも違いがみられる。ニホンミツバチは巣の成分が蜜ろうで、ハリナシミツバチは巣の成分がプロポリス（蜂の体からでた蜜蝋と、木の樹脂をまぜ合わせたもので、つまり天然の抗菌材となる）である。ハリナシミツバチは、樹木や洞窟など、雑菌の多い場所でも巣を清潔に保つことができている。これはプロポリスの効果によるものであるとされており、ハリナシバチでは、微生物によるコロニーなど、

目立った病気というのがほとんどないようである。

ハチミツの採取の仕方とハチミツの味も私たちが想像しているものとは全く異なっている。ニホンミツバチのハチミツは、セイヨウミツバチなどと同様に巣板を垂直に形成するが、商業生産に適したセイヨウミツバチのように可動巣枠を使った巣箱は使用せず、天然の巣板形成に近い状態を保つ形の重箱巣箱を使用して、重箱の最上段のみ（巣全体の20%）を切り外して、巣ごと圧搾して採蜜するが、ハリナシミツバチのハチミツは、セイヨウミツバチのような巣枠を設置した遠心分離機やニホンミツバチのような巣板の圧搾機のような機械を使わず、一つ一つ、つぼのような形の巣から手作業で吸い上げるといっても手間のかかる作業となっている。「ハチミツの質感と味」を想像すると私たちは「とろりとした質感、甘い味」を連想すると思われるが、ハリナシミツバチの巣から採れるハチミツは私たちが抱くハチミツのイメージとは程遠い「酸味」が特徴的であり、また、質感もさらさらとしている。これは、ハリナシミツバチのハチミツは、セイヨウミツバチやニホンミツバチのように蜂が羽で煽いで水分を飛ばすという行動を取らないため、水分量が高くなっているからであるが、水分量が高くて酸味があるという状態にも関わらず、腐食が進行しないのは、その酸味がハリナシミツバチの巣の成分であるプロポリス由来の豊富なポリフェノールによるものであり、またプロポリスの抗菌作用によって常温で長期保存が可能となっているからである。

3. ハリナシミツバチは儲かるか？：これまでのプロジェクト内容

私が考えたプロジェクトは、ハチミツを販売することによってブアイヤン村の新たな収入源とすることを目的として、ブアイヤン村の若者たちにハリナシミツバチの養蜂を行ってもらおうというものである。私は、2022年の6月にゼミ合宿で静岡県賀茂郡東伊豆町の町営みかんワイナリーを訪れ、そのワイナリーで、かつては大量廃棄されていたみかんをワインとして販売することで新たな産業を生み出したという話を聞き取りして、「価値化されていなかったものの製品化によって新たな産業を創出すること」を学ぶことができた。そこで、ブアイヤン村によく飛んでいるハリナシミツバチを、採蜜を目的として巣箱で養蜂を行うことによって、価値化されていなかったハリナシミツバチを製品化し、採れたハチミツを村で販売することで新たな収入源とすることを計画した。

ハリナシミツバチは、飼養のしやすさから、現在、東南アジアやアフリカ、南米の熱帯地域において、急激に養蜂と採蜜が広まっている。ハリナシミツバチは針がないため飼養者を刺さないということは大きな利点である。さらに飛行距離が短いということから、逃避の可能性が低く、飼養に向いている。ハリナシミツバチのハチミツは、プロポリスにより常温での長期保存が可能となっているため、熱帯の生産者でも大掛かりな冷蔵設備などに投資せずとも市場に供給することができて、利便性も高い。前述のとおり、抗菌性の高い機能性食品として注目され、世界的に需要が高まっているため、高値で買取されることが多いということもあって、これまで現金収入源に限られてきた熱帯の山間部居住の農民たちが飼育を試み始めているという状況にある。ボルネオの熱帯雨林の山中にあるブアイヤン村の若者たちも、そうした噂を聞いて、ハリナシミツバチのハチミツの換金性を魅力的に感じていた。

これまで、このプロジェクトでは、プロジェクトを実行する前段階として、2022年度には、ハリナシミツバチの特徴を把握し、ブアイヤン村において最も適した巣箱の設置場所を村の若者たちとオンラインで交流しながら考え、また学習院生は消費者の目線から、採れたハチミツを瓶に詰める際の「可愛い」瓶詰めラベルデザインなどを考えてきた。また2023年度には、私自身は行くことが叶わなかったが、8月にDISSOLVAのメンバー10人がブアイヤン村を訪れ、巣箱を村の方と共に製作し、計画していた場所に巣箱を設置することで、本格的に事業化する前のパイロットプロジェクトを開始することが

できた。パイロットプロジェクトの始動にあたっては、マレーシア・サバ州ピナンパン郡のクアイ村においてハリナシミツバチの養蜂を行っているノエルさんにインタビューを実施し、ハリナシミツバチの性質についての基本情報や、適切な飼育方法についてアドバイスをいただくことができた。

4. ハリナシミツバチと共生する：インタビュー内容の紹介

ノエル・セアランドゥさんは、マレーシア・サバ州ピナンパン郡のクアイ村という先住民の村で生まれ育った20代後半の若者で、実家のお母さんと一緒にハリナシミツバチを観光/教育目的で飼育しており、DISSOLVAメンバーにも有益なアドバイスをくださった。サバ州西岸部の山間部ではブアイヤン村が古くからの有力村であるが、ブアイヤン村を流れるバパール川と並行して流れるモヨグ川の下流域にあるクアイ村もまた古くからの有力村である。いまでも伝統を引き継ぎ、誇り高く先住民の文化を伝える「モンソピアッド文化村」という観光/教育施設を村で運営して、サバ州でも一番人気の高い訪問場所となっている。ノエルさんの家族は、強靱な戦士として伝説上の英雄となったモンソピアッドの子孫であり、お祖父さんとお祖母さんは先住民文化の中では高位にある「ボポリザン」と呼ばれる呪術師/医師/薬剤師であった。すなわち、薬効性のある動植物の素材についての伝統知を受け継いだ家系である。お父さんは、長くマレーシア政府の高官として働いた後に引退し、お母さんは、教師であった母方のお祖父さんの教えを引き継いで教育熱心で、クアイ村を中心とする周辺の数か村を取りまとめる社会活動に取り組んでいる。ノエルさん自身も、大学でITの勉強をしたのちに、長く地域のボランティア活動に関わり、現在はサバ州で最も有力のNGO団体Forever Sabahにおいて、教育研修活動コーディネーターを務めている。

ノエルさんにDISSOLVAメンバーのユウ（理学部生命科学科2年・中村優里）が、ハリナシミツバチやその養蜂についてのインタビューを実施した。以下は英語で行われたインタビュー内容を要約したものである。

二ホンミツバチの社会性について：ハリナシミツバチは、別々の家（巣）にいる限り、他のハリナシミツバチとは争わない。ハリナシミツバチは他のハリナシミツバチの家には入ろうとせず、ハチミツを集めて花々の間を飛び回る際に平和的に共存できる。協力しているとは言わないまでも、お互いに花を取り合ったり喧嘩したりすることはほとんどない。ただ、先日ハリナシミツバチの巣を3巣箱ほど麓の村からブアイヤン村に運搬し、ひとまず下ろして一緒に並べて仮置きした際、巣と巣がとても近くに置かれたため、ハリナシミツバチはどの家が自分の家なのか混乱し、お互いに戦ってしまった。**自分の家と他の家の区別について：**たとえば蟻はフェロモンを感知するために触覚に頼るが、触覚を壊すとフェロモンが効かなくなって、お互いに戦うことになる。ハリナシミツバチは違う家を認識する機能もっていて、家を出る時は、体内に備わっている生物学的GPSに従って行動し、同じ家に戻ることができる。**巣箱の特徴について：**通常天然のミツバチの巣には、養蜂用のハリナシミツバチの巣箱のような二階の部分がない。養蜂用の巣箱は、巣が作られた天然木の切り株を一階部分、その上に四角いトレイのような二階部分がある。ハリナシミツバチが天然木の巣から、トレイの中央に開けた穴を通じて二階部分に這い上がり、トレイの中に新しい巣作りを始めるのを待つ。新しい巣が作られ、幼虫が産み落とされる上の箱がハチミツの保管場所。食べ物は全てここにあり、下の箱がハリナシミツバチの親の巣（家）となる。ハチミツが多い上の巣箱に、蟻などの外敵が入ってこないように注意したい。外敵に邪魔されているかどうかは、巣の入口を見ればわかる。入口のプロポリスでできたチューブが長い場合は蟻などの外敵が攻撃していることを意味し、入口のチューブが短い場合は問題がないことを意味す

る。養蜂の難しさについて：ニワトリやうさぎの世話をするよりも、ハリナシミツバチの世話をする方がはるかに簡単。ニワトリやうさぎは朝・昼・晩に餌を与えなければならない。ハリナシミツバチは、家が乱されていないことと、周りに花があることを確認するだけで十分だ。ハリナシミツバチは500～1000mの範囲でハチミツを集める。彼らの巣を別の場所に移動したければ、太陽が出ていない時に巣を移動する必要がある。ハチは自分の家に戻るとい生物学的GPS追跡装置を体内に持ち、昼間、ミツバチが食料を探しに出かけている時に彼らの家を移動してしまうと、彼らは巣箱が移動されたことに気が付かず、元あった巣の場所に戻ってしまい、そのまま死んでしまう。また、採蜜は乾季に行く。なぜなら、乾季はほとんど毎日晴れていて、ハリナシミツバチが食べ物を探すために一生懸命働いて家にいないから。1ヶ月ほど雨が降る雨季には採蜜をしない。より多くのハチミツを採るために、天候や時間を気に掛けることには苦勞する。一番大変なのは、女王蜂と新女王蜂を上手く見つけること。巣の増やし方は主に2つあり、1つ目は巣箱を誰かから購入すること。これは簡単だがよりお金がかかる。2つ目は新しい家を建てて新しい女王が来るのを待つこと。これにはより長い時間がかかる。また、50%の確率で失敗する。ハリナシミツバチの生態系について：ハリナシミツバチを含むあらゆる種類の昆虫は1種の花粉媒介者であり、彼らは異なる花に受粉する。昆虫には、どの花に受粉させるかという異なる役割がある。私はハリナシミツバチの蜜を販売するために養蜂を行っているのではなく、花粉を受粉させるためにハリナシミツバチを飼っている。先日麓の村から購入したハリナシミツバチは、飼い慣らされたハリナシミツバチで、家畜化されていて、おとなしい。養蜂の商業化について：私にとっては、自分の考え方、やり方を捨てることになるので非常に苦しいこと。私がやりたいことは、元々いる野生の小さなハリナシミツバチがエコシステムの中に生きていて、自分もそのエコシステムの中において、壮大な自然界を感じながらハリナシミツバチの養蜂を行うこと。しかし、今回入手した家畜化されている少し大きめのハリナシミツバチがやってくることで、既存の天然の小さなハリナシミツバチは殺されてしまう。今まで作ってきたエコシステムがそれによって壊されてしまう。それはハリナシミツバチが死んでしまうだけでなく、小さなハリナシミツバチに頼っていた花にも、決まった花たちの受粉を行っていた虫にも影響が出る。多様性が失われてしまうことになる。私としてはモノカルチャー的なものに移ってしまうことは非常にやりたくないことだ。

5. 最後に

養蜂はお金を稼ぐために行くことだと思っていた。しかし、ノエルさんへのインタビューを通して、花粉を受粉させるためにハリナシミツバチを飼っていたり、ノエルさんのお母さんのようにハリナシミツバチの自然界における役割を知らせるためにハリナシミツバチの養蜂を行っていたりなど、養蜂を行うことに様々な目的があることを知った。特に、ハリナシミツバチによってエコシステムが守られている、持続可能な生態系の一環として役立っているという重要性を学べる特別な機会として、「お金を稼ぐ」ことよりも大きな意味があると感じた。また、ノエルさんの「人間も自然界の中の一員として暮らしている」という考え方に触れることで、自分を取り囲む環境について、より広い視野を持って関わるべきであると気づかされた。私が行おうとしていた養蜂は、ノエルさんの指摘の通り、多様性を壊してしまう可能性がある。これを受けて、誰かから貰い受けたハリナシミツバチを養蜂するのではなく、野生のハリナシミツバチを養蜂することに挑戦してみるのはどうだろうか。これからもブアイヤン村でのハリナシミツバチの養蜂について考えていきたい。

ブアイヤン村の地理的環境と洪水対策プロジェクトの提案

鈴木琉生

1. はじめに

ブアイヤン村はマレーシアボルネオ島・サバ州のクロッカー山脈の中にあり、ドゥスン族が港との交易を行う際に使用していた塩の道 (Salt Trail) が通っている。雄大な山々とパパール川に囲まれた自然あふれる土地である。また、赤道に近いマレーシアは高温多湿の南国で、熱帯雨林気候の国に属す。ブアイヤン村の住居が多くある部分は平坦であるが周辺は起伏に富んだ地形をしており、大きな坂になっている箇所があったり、川にたどり着くのにある程度下らねばならなかったりと高低差の激しい環境である。

そのような地理的要因から、雨が降ると低地側に多くの雨水が流れ込んできてしまう。ここ、ボルネオではスコールと呼ばれる非常に激しい雨が降る。短時間でやむものがほとんどであるが時折、長時間雨が降り続け大量の雨水が降り注ぐ。かなり頻繁に雨が降るので空気は湿潤で、独特の蒸し暑さを生み出している。地面も柔らかいことがほとんどである。非常に多くの雨が降った場合、村だけでなくその周辺地域にも影響を及ぼし、生活や往来が困難になる可能性も考えられる。かつて、大雨により橋が崩落することもあった。高所に位置することから、村に至るためには橋を渡って大きな川を超える必要がある。すなわち、橋は村にとって交通面で重要な役割を持つが、その橋が崩落したことで行き来が困難になった。それほどまでに村にとって雨は密接な関係にあり、適切な対処が必要な存在である。

我々が活動を行う中の拠点であった生物文化遺産の家の周辺も例に漏れない。ぬかるみが多く移動する際には足を取られたり、履物や足には泥が多く付着したりした。要因の多くはその土壌と地形的に水が流れ込みやすいことであると考える。

2. 地理的環境の弊害を克服するための対策：これまでやってきたこと

この状況は村にとって芳しくはない。我々からしては、移動時の転倒の危険性があることや活動を行う際の妨げになること、毎回泥が跳ねては心理的に喜ばしくない、といった側面がある。また、村全体としてみても、憩いの場としてほしい生物文化遺産の家へ行きづらさがあることやこの道を歩く人が立ち寄った際に十分に安心できない可能性も否定できないなどといった悪影響も考えられる。

雨に関わらず高所から流れてくる湧き水に対処すべく、小川を作りダム化させて流れを矯正したことがあった。そこで用いたものが塩化ビニルを用いた管、いわゆる塩ビ管であったが、殺風景というか、見てくれが良いとは言えずこれも改良が必要である旨が伝えられた。こちらの見栄えの改良もプロジェクトに組み込み、計画を立てていった。村には塩ビ管を設置して流れる水を一つの地点にまとめている。しかし、自然と木造建築の調和の中に無機質な塩ビ管が剥き出しに存在し不和を生み出してしまっている。それに対しては無機質さが表れないように手段を講じていきたいが、同時に塩ビ管のみならず小川の周囲の地面も整備する必要があると考える。生物文化遺産の家の周辺にはかつて場所には木々があった。生物文化遺産の家の改修に伴い、作業の進めるうえで邪魔になってしまうとの理由で伐採されてしまった。現在その場所は更地となっており、草が伸びてしまっている。こちらも景観の改善を図りたい。

ここまですら整理すると、要点は以下のようになる。

1. マレーシア、サバ州にあるブアイヤン村では激しい雨が降る。
 2. 斜面から流れてくる雨水に対する処置を行う必要がある。
 3. 対策を講じるとともに、周辺の景観の向上も図りたい。
- 以上である。

3. 地理的環境の弊害を克服するための対策：2023 年度に現地で行った事業

レインガーデン建設計画を推し進めるべく、渡航前にどのような手段があるかを調べた。一つの例としては、東京都世田谷区や神奈川県葉山町で活用されている都市型の対策法を紹介したい。これは日本における洪水対策の一種であり、ブアイヤン村にも応用できないかと考える。紹介したい水害対策案はレインガーデンである。窪みを作りそこを透水性の高い土や砂利を敷き詰める。そこに雨水を集積させることで激しい雨が降った際に雨水が流れ込むのを防ぐという方法である。一つは竹中工務店のウェブサイトを参考にさせていただいた。

土を掘って窪みを作り、その窪みの中には透水性の高い材料が敷かれているので通常の土壌より水はけがよく速やかに、かつ効率的に貯水、排水を行うことができる。レインガーデンはグリーンインフラとして期待されており、国内外問わず施行されている。実際に横浜市が局地的な大雨に強い街を作っていく上での取り組み事例として国土交通省のウェブサイトにも紹介されており、非常に関心の高い方法といえよう。神奈川県葉山町で実際に行われた施工の例を見ていく。ここでは、推定段階では雨水の流出に対して約2割の貯留浸透効果が発揮されると見られた。この施工は今年の3月に実施されたが、もともと水の流出が確認されていたこの場所では時間数ミリ程度の雨であれば流出が起きなくなった。また、植栽も一か月過ぎた時期には定着がみられ、順調に環境が改善されているようである。洪水対策に有益な結果を残したレインガーデン施工であったが、この方法を同じく雨水流出の問題が確認されるブアイヤン村に応用できないかと考え今回のプロジェクトを行った。

このプロジェクトでまず初めに行ったことは生物文化遺産の家の周囲の住環境の改善である。前述した通り、生物文化遺産の家周辺は雨が降った後は土が非常に柔らかくなり、ぬかるみも多くなってしまふ。そこで、まずはこの付近の改良を行おうと考えた。最初に手を付けたのが住居の多いエリアから至るための道である。これは我々が作業を行う上で毎日通っていた道でもあり、ここの道を通りやすくするのは急務であった。竹を鉋で加工し蛇腹の形にすることで、重い重量にも耐えられるようにする。また、木からできた杭を打ち込み、その間に先ほどの竹を設置することで簡単に流れないようにし、定着を図る。こうしてできたのが右のような竹の道であり、この道を作ったことによって通る際に泥が跳ねたり、ぬかるみを踏んだりすることがなくなった。しかし、設置したばかりで、かつ竹の大きさがまばらなので一部に若干ぐらつきがみられる。これは使われることが増え、踏まれる回数が多くなれば解消できる可能性があるそこでそこに期待したい。

次に、生物文化遺産の家と倉庫の間の道に堀を作成した。この堀の作った道は先ほどの竹の道の箇所同様ぬかるみのできやすい道であった。ここは生物文化遺産の家に隣接しているので水が溜まってしまうと湿気で木材が腐ってしまう可能性も考えられた。そこで、水路を作ることで水の流れを適切にし、ぬかるみをなくすだけでなく効率的に排水を行うことを可能にした。また、その堀にはやや大きめの石を敷き詰めてある。これは、水を適切に流すだけでなく生物文化遺産の家周辺の景観を良好にしている。ただ溝を掘るだけでなく、石を敷き詰めることでまばらな石畳のように見え、手入れをされているような印象を与える。いよいよレインガーデンの作成である。

ブアイヤン村でレインガーデン施工を行うにあたり、まず問題となったのが土壌の違いであった。村

周辺には赤土と呼ばれる非常に水はけの悪い土が多いと聞き、一度雨が降ると排水が難しく、また土壌に存在する栄養素も流されるのだそうだ。これでは植物が育ちにくくなってしまう。このままの土ではレインガーデンを施工するのは難しいので、実際施工に用いる土は既存のものではなく、黒土とすることにした。大量の黒土を必要とするのでこちらはあらかじめ準備していただいた。次に砂利や小石が必要となる。こちらも同様大量の石を必要とした。こちらは先ほどの斜面から採取することで長い距離を移動することなく集めることができた。また、道路における小石を取りのぞけたのでその道を歩く上での環境も改善を図ることができたと考えられる。次に作業であるが、まずは長方形の形に穴を掘ることから始める。始めにスコップで大きく掘り、その後穴を整形する。後に小石等を敷き詰める工程があるので深めに掘らなければならない。

次は、掘った穴に黒土を敷き、均した上に砂利や小石を詰める。この際、黒土と小石の間に目詰まりが起きてしまうと排水機能が上手く発揮されず効果が薄れてしまうので網目状のシートを挟む必要がある。最後に、施工したレインガーデンに花を植える。これは村の子供たちと一緒に作業を行った。我々が穴を掘り、そこに用意してもらった苗を入れ込み、再度土をかぶせる。この花を植える工程は非常に重要だと考える。植物の生命維持のサイクルによる気化熱によって都市部ではヒートアイランド現象の改善が見られた。ここ、プアイヤン村は都市ではないが、日中は気温がとても高くなる。このレインガーデンによって周囲の気温を効果的に下げることができれば、それも生活環境の改善に寄与しているといえるだろう。また、景観がとても良くなることも恩恵の一つである。同時に、生物文化遺産の家の近くの小川や塩ビ管の周辺にも花を植えた。これは景観の改善を主としており、以前貯水池の施工を行った際に設置した塩ビ管が景観を損ねているが、それを少しでも華やかに映るように行ったものである。こちらでもレインガーデンの花同様に村の子供たちと一緒に植えた。

4. 水害対策に関する伝統的な知恵について：現地で行ったインタビュー

プアイヤン村では少しながらインタビューを行った。そこではかつて起きた洪水の被害の程度をうかがったほか、どのような弊害があり、何を優先的にやりたいかも教えていただいた。これまでに起きた最も大きな洪水は橋が壊れるほどであったという。プアイヤン村は先述した通り山の中に位置する高低差のある村であった。その橋を壊すほどということは、村にはよほど甚大な被害が出たはずである。また、自然の力は我々が想像するよりも恐ろしいもので、大きな洪水が起こると川の流れを変えてしまうこともあるのだとか。また、単に危険なだけではない。現地では狩猟採集が活発に行われており、野生の動物や魚がよく食卓に並ぶ。自然とともにある村ゆえの問題ではあるが、洪水により川が氾濫するとそこには近づくことができない。また、植物もやられてしまうなど食糧供給の問題も同時に孕んでおり、いかにプアイヤン村にとって洪水が危険なものであるかが理解できた。

そのような諸問題に対して優先的にやりたいと考えることは近隣に木々を多く植えることや護岸のために川沿いに大きめの石を設置することだという。伝統的にプアイヤン村では丈夫で速く成長するポリンドン (Polindung, *Gliricidia Sepium* マドルライラック) を川沿いに植えていた。しかし近年木々の伐採が進み、河川の浸食から守る能力や山の持つ保水力が落ちてきてしまっている。木々は水害から身を守るだけでなく蒸散作用による気化熱で高温の環境を涼しくさせることができるので積極的に行ってほしい。

5. 今後の展望

以上、今年度の DISSOLVA で行った洪水対策のプロジェクトを紹介させていただいた。主に行った

ことは①竹の道・堀の施工、②レインガーデンの施工、③レインガーデンや小川への花植え——この三点である。今回のプロジェクトで行ったことがどれほどまで効果を持つかは現段階ではまだ不明であるが、このうちの一つでも効果的に作用してくれたら幸いである。こういったものは即座に影響を及ぼすものではなく、時間をかけて作用していくものだと考えている。毎週現地とZOOMで交流・情報共有を行っているのでそこで今回我々が施工したものの経過を報告していただき、じっくりと観察していきたい。また、もちろん今回重点的に作業を行った生物文化遺産の家の周辺以外にも洪水等の水害に悩む場所はあるはずなので今回行ったプロジェクトが成功したのならそのエリアを拡張してさらに住みやすい村にしていきたいと思う。今回プロジェクトを進めていくにあたって協力していただいた村の方々には感謝してもきれない。竹・石の採取や加工、穴掘りと村の皆様の協力は多岐にわたった。その協力や思いを無碍にしないためにも、現地にいなくとも精一杯私がプロジェクトに取り組み、ブアイヤン村の環境をよりよくすることに努めていきたい。

ブアイヤン村の結婚観と家族観

——お年寄りから若者まで

平野智紗

1. はじめに

ブアイヤン村はマレーシア・ボルネオ島サバ州のジャングルの奥地にある。村人は山菜やフルーツの採取、稲作、川魚や動物の狩猟など自給自足で暮らしている。しかし、就労機会や教育機会の限られた山奥で生まれ育ったブアイヤン村の若者の多くは、村を離れ、町で生活している。また、近年インターネットの普及や技術の進歩に伴い村での暮らしの変化も起きている。すると彼らの家族形成や結婚に対する考え方や価値観はどう変化してきているのか、また今までの伝統的な慣習とどこが違うのかを調べたいと思い、幅広い年齢の村人にインタビューした。インタビュー対象者は、女性7名、男性1名の8名で、年齢は20歳から70歳までさまざまな年代に答えていただいた。8名のうち、5名はブアイヤン村の在住者と関係者であるが、2名はティヌハン村在住者、1名は旅行会社のガイドである。四輪駆動者が徒歩でなければ入ることのできない山奥にあるブアイヤン村と、幹線道路に近く平地にあるティヌハン村、そして州都コタキナバルの在住者を比べて、価値観に違いがあるか、知りたいと思った。質問は、結婚観と家族観を中心に、生まれ育った家族および結婚後の家族に関わる、家族構成や結婚出産の決定要因について聞いていった。自由回答インタビューで答えていただいた内容を要約して、ここに掲載する。

2. インタビュー内容：ブアイヤン村の場合

サバ州ビナンパン地区ウルパパール地域に位置するブアイヤン村に在住する70代、50代、20代女性のインタビューと、ブアイヤン村出身で現在は村を離れている30代と20代女性の事例を紹介する。

●ロミナさん（76歳、死別）：ウルパパール地域のティク村出身で、両親は小さい頃からいなかった。山々に囲まれたティク村は稲作が出来ず生活が厳しいため、7歳の時に親戚の居るブアイヤン村に引越した。高校へ進学出来るお金がなく、7歳の時から今までずっとブアイヤン村で育ってきた。25歳の時にブアイヤン村の人と結婚した。子供は13人授かったが、生まれてすぐ高熱にかかって5人が亡くなってしまった。病院が遠く、村には薬も無く、街までの道路も無く、十分なお金も無かった。子供は自分の家で産んだ。昼であれば友達に手伝って貰って出産した。夜間に産気づくと自分1人で出産に挑んだ。人がいると邪魔なため、事前に姉や親戚から出産の方法を学び自分でへその緒も切った。夜に出産した事は3回あった。出産時は激痛を伴うが、次々と妊娠してしまうから子沢山になった。また村の薬を飲めば陣痛も和らいだ。ブアイヤン村での子育てはとても大変だった。当時お金がなくて、村で収穫したお米や野菜をコタキナバルまで1日かけて歩き、売りにいった。そして、売って得たお金で塩を買って村へ戻るような生活を旦那と子供の面倒を交替しながら見る日々だった。子供達を13歳になるまでブアイヤン村で育てたが、子供達が高校や大学に行くまでのお金は出せなかった。10年前に病気で旦那を亡くして、一人で稲作をして生活している。年齢的にお金得ることが難しいが、政府から1か月300リングットの支援をもらって村の人々に手伝ってもらいながら生活している。今は独りになってしまったが、結婚して子供に恵まれたこの思い出で今も幸せに生きていける。幼少期の戦争の記憶もある。日本軍がティク村に侵入してきて栽培していた果物や食物を奪われてバナナの茎しか食べ

るものが無かった。戦争が続いている1年くらいは塩を食べられなかった。日本軍が街のほうには多く、行けば殺されると思っていたため塩は街で購入できなかった。その後、隣村がティク村を襲撃。父や母の土地が他の村のものに奪われた。家も果物の木もゴムの木も奪われ帰ることが出来なくなった。今でもその当時の記憶から怖くて帰れない。

●**アイリーンさん (58歳、既婚)**：ボボリアンになる修行があったため小学校卒業後、進学同意が両親から得られなかった。18歳の頃、キノップ村からカテキストとしてブアイヤン村へキリスト教を布教しに訪れていた当時20歳だったジュリウスさんと出会う。知り合って5年で結婚。暮らしがよく似ているウルバパールの男性と結婚したかったから自分で相手を決めた。子供は5人いる。長男は事故で亡くなってしまい、長女は看護師、次女はメイクアップアーティスト、次男はピナンパンで働いて、末っ子はまだ17歳で高校に通っている。子供たちは小学校まではブアイヤン村、その後、町の中等学校へ進み卒業まで育て今は独り立ちしている。養育するのにお金は厳しいが、歩いてお金を子供に渡しに行っていたため、交通費はかからなかった。子供は5人と当時にしては少なかったが、小学校を卒業してからは町で寮生活になり、距離が離れているため心配事も多かった。特に、子供に学校へ行かせても親に相談せずに辞めてしまうこと。しかし長男は学校辞めても村に帰ってきてゴムの木を栽培し始めて、NGOのプロジェクトに参加してくれた。5人それぞれ異なる性格を持っていて、指示してもすぐやる子とやらない子がいる。出来なくても助けを兄弟間や家族内で求めて自立した大人になってくれて良かった。本音でいうと、子供達にはブアイヤン村にいて欲しい。各々の仕事があるからしょうがないけど、休みの期間には戻ってきて欲しい。村に帰ってきて暮らしをすることを考えてくれた子にだけ土地や家の相続をすると決めている。5人平等に分けてしまうとブアイヤン村に帰ってこなくて田畑の面倒見られなくなる人がでてしまうから。今では頻繁に会えない代わりにSNSで連絡を取り合っている。また1年に1回家族で集合しご飯を食べ、話し合いや仕事のこと、恋愛話を聞く機会を設けている。

●**イメルダさん (31歳、既婚)**：長女として生まれた。旦那さんのトニーさんとは大学生の時、ショッピングモールのレストランにいた時に出会い、電話番号をもらった。それが2012年で、その6か月後に交際をスタートした。結婚は2021年と、9年もの期間を経て婚約に踏み切った。結婚に至るまでの9年間、大学に行き、修士まで学ぶ。修士号の取得などで忙しかったため、結婚は考えていなかった。また家の長女として親から兄弟姉妹の面倒を見るよう言われており、9人の弟妹が学校に行けるように金銭面でもサポートしないとイケなかった。旦那さんも仕事をしていたため結婚を急ぎはしなかった。しかし、25歳になって結婚を考え始め、町での生活の安定のために結婚に踏み切る。2021年に結婚式を執り行った。コロナ禍ではあったが、お互いの家族同士で小さな規模だったため、あまりお金をかけずに行ってよかった。現在は職場のあるクダットの学校の宿舎に住んでおり、旦那さんはピナンパンに住んでいる。クダットからピナンパンまでは約150km離れており、毎週金曜日には仕事が終わる15時にクダットを出発し、車でピナンパンまで向かう。そして日曜日には帰ることを繰り返している。小学校にやっと正規雇用されたため、あと3年間は働いてからピナンパンの町で旦那さんと暮らしたい。町ではアパートの値段が高く持ち家のほうが安い。旦那さんは少しの土地しか所有していないが、今はお金を貯めて家を建てられるようになりたいと共働きしている。旦那さんはピナンパンの町寄りの村出身で山奥の暮らしをしたことが無いため、ブアイヤン村とはライフスタイルや文化がとても異なる。しかし、山奥の暮らしや兄弟姉妹が多いこと、自然との生き方などに理解を示してくれた。それはイメルダさんにとって結婚相手に求める条件でもあった。町で住むなら、二人とも働かないと生活を賄えない。ブアイヤン村であれば野菜やフルーツは自然から得られるが、暮らしは大きく異なるだろう。

将来子供を持つとすれば、町の暮らしと村での暮らしどちらも選べるように育てたい。5、6歳までは町で暮らし、12歳まではブアイヤンで暮らすのがいいかと思っている。旦那さんとは別々に暮らすことになってしまっても構わない。一人で子供の面倒をみることは小さいころから慣れている。将来子供は旦那さんが6人欲しいというのが、都会の傾向として2、3人の子供を持つことが多くなっていることもあり、4、5人までが最大だと思う。金銭的に負担が多いため、子供の数ではなく、一人ひとりに与えられる質が重要である。子供に高い教育を与えることは、子供たちにより良い暮らしを与えることと同じで、教育さえあれば仕事先を見つけやすく人生を自分で変えることができる。就職先を見つける時、SPM (Sijil Pelajaran Malaysia) と呼ばれる中等教育修了資格が要求されることがほとんどである。マレーシアの教育制度として、中等教育の卒業は日本でいう高校卒業であり、その後SPM 卒業試験を受ける。成績が良ければ大学進学の前段階にあたる準備教育課程で1年間学ぶか、その他としてカレッジで約3年学ぶ。その過程を経てから大学へ進学するという。村の人々から子供はいつ授かるのかと圧力を感じるが、その言葉もブアイヤン村の温かさである。

●**リンダさん (22歳、婚約予定)**：ウルパパール地域のティンパヤサ村で生まれ育ち、ブアイヤン村に移住。今年の2023年11月11日に婚約する。お相手は同じウルパパール地域のポンゴボン村出身のスタンリーさん。リンダさんが12歳の時、スタンリーさんが20歳の時、仕事のためにブアイヤン村を訪れていた時にリンダさんと出会う。中学、高校とリンダさんは町で暮らし、村へ帰ってきた1年前から交際し始めた。婚約は法律上結ばれることを約束するもので、まだ2人きりで住むことは許されない。お金が貯まった1年後にウェディングを予定していて、結婚披露宴をした時点で2人は共に暮らせるようになる。結婚に踏み切ったのは旦那さん。リンダさんは結婚を特に考えていなかったため、将来が不安だそう。町では金銭的に暮らすのが難しいため、今後も村で暮らしたいと思っている。村の慣習として、婚姻後は女性が男性の出身村について行くのだが、家族の事も気がかりでブアイヤン村に住もうと考えている。子供に関しても、沢山持つことは金銭的に難しい。村で暮らすとなっても4人が限界かと思う。リンダさん自身は、7人兄弟の次女として生まれ、沢山の兄弟と暮らすことはとても楽しいが兄弟に会えることは滅多に無い。今回のディゾルバを通して、兄弟がブアイヤンに戻ってきてくれて会えたのが嬉しい。その他だと、クリスマスかカアマトンの時期にブアイヤン村へ帰ってきて兄弟が揃う。

●**サブリナさん (20歳、未婚)**：準備教育課程と呼ばれる大学入学前に通う学校へ通っていて、来月の9月 (インタビュー時は2023年8月) に卒業する。将来ブアイヤン小学校で先生になりたいため、大学では教育学を学びたい。現在、姉や兄から学費を貰って学校で勉強が出来ており、大学はサバを離れてクアラルンプールへの進学を考えているが、学費が高いため奨学金やローンを借りてやり繰りするしか無い。兄弟は3人の兄と2人の姉、弟1人に妹1人の8人兄弟である。兄たちはピナンパンで働いており、長女は幼稚園の先生、次女は父母と共にブアイヤン村で暮らしている。弟は高校を終えたばかりで、1番下の妹もブアイヤン村で暮らしている。他の兄弟は大学へは行かず、高校や専門学校を卒業後に働き始めた。将来の結婚は特に考えたことが無い。両親や兄弟姉妹、コミュニティのことを考えることで精一杯。数年前、学校の友人関係で問題を抱えていた時に家族に話すことが出来ず、話し相手が必要だと思い彼氏を探そうとした。しかし、将来自分が何をしたいか考えるようになって考えが改まった。将来もし夫を持つなら、お金持ちでなくとも働き者で尊重しあえる人であって欲しい。また、今の時代はお金が必要になり、子育ては難しいから現実的に最大2人までだと思う。

3. インタビュー内容：ティヌハン村およびコタキナバル在住者の場合

次に、サバ州西部トゥアラン地区に位置し、幹線道路に近く平地にあるティヌハン村に在住する 50 代女性と 50 代男性の事例を紹介する。

●**ジュリアナさん（58 歳、既婚）**：現在、ティヌハン村に暮らしている。13 歳の中学生の時に同級生と恋に落ちて二年間付き合ったが、その後、今の旦那さんに自らプロポーズし、40 年前の 16 歳の時に結婚した。当時その年齢で結婚するのは普通だった。7 人の子供に恵まれたが、現在では村に残る子供は二人のみで、残りの子供たちはクアラランプールやコタキナバルなど街で働き暮らして居る。クリスマスやカアマトンの季節には帰ってきてくれるが、休暇をすべて消化してしまい、多くは会いに来てもらえない。村の生活は果物の木やゴムの木があるし充実している。しかし、現在ティヌハン村では子供たちのように若者の街への流出が大きな問題である。農業は体力仕事なので、疲労や暑さなどの理由から若者は関心を示していない。農業に従事してもらえないと畑がなくなり、村の農業の未来がなくなるという。

●**ビルさん（59 歳、既婚）**：ティヌハン村で生まれ育った。42 年前の 17 歳の時に中学の友人と結婚した。中学生の当時、付き合っていた彼女が浮気していたことを知り、彼女の親友である今の奥さんと出会い手紙交換をして付き合った。奥さんはティンダル・ドゥスンと呼ばれる民族で異なる村の出身である。2 年ほど交際したのち、ビルさんがプロポーズをした。当時 17 歳であったが、仕事もあって経験を十分培ったタイミングで、家族を作る準備ができたと思い結婚に至った。また若いうちのまだ力の残っていて家族を十分養える時に結婚はしたかった。だから早めの結婚を考えていた。子供は 4 人おり、1 人以外は街で働いている。特にクアラランプールで働く息子さんは 4、5 年に一回しか帰ってこれない。一緒に村に住んでほしいが子供たちは現金収入が得られないため厳しい。ビルさんはティヌハン村での暮らしが好き。街で暮らすとお金がかかるし住む場所も探さなければいけない。年を取って慣れてしまったが、自給自足が当たり前で大工として現金収入を得ており、十分だと言う。

最後に、サバ州北西部コタブル地区の出身で、現在は州都コタキナバルに在住している 30 代女性のインタビューを紹介する。

●**ホスニさん（38 歳、既婚）**：生まれた場所はコタブル。コタキナバルから車で 2 時間程度のところにある。3 年前に結婚し、3 歳と 1 歳の子供がいる。結婚は早くしないと恥ずかしいと思い焦っていて、また早く幸せな家族を築きたかったため、職場の同僚に紹介してもらって 2 か月でスピード結婚した。23 歳から 25 歳までの間に子供が生まれれば安心だったが、年を重ねることに出産や育児は大変に感じる。幼稚園に行かせるだけでも毎月 750 リンギットがかかり、養育費が高いため子供は多くは欲しくなかった。多くても 3 人だと思う。コタブルでの物価の上昇もあり、働くためにコタキナバルに移り住んだ。コタブルだと 1 か月に 1000 リンギットほどしか稼げないが、コタキナバルなら 1500 リンギット稼げる。5 人兄弟の長女として生まれ、仕事で忙しい間は兄弟や母親が子供の世話をしてくれている。

4. おわりに

これらのインタビュー内容から総じて言えることは、家族形成や結婚に対する考え方や価値観は山奥の村でも、幹線道路に近い村でも変化してきているということだ。そして、若者が町へ流出し、それが親の世代のみならず今後の世代にも影響しているということだ。昔は、村に住み続けるか、結婚相手の村で農業に従事するかで、結婚しても育ってきた環境と変わらない生活であった。しかし、今の世代の人々には、誰が親の土地を相続するのか、親や兄弟の面倒は誰がみるのか、どこに定住するのか、どんな仕事に就くのかなどの問題が発生している。それは個人の将来設計の問題と家族やコミュニティ

との問題が入り乱れ、混乱が起りやすい時代になっていると考える。また、村のコミュニティには自然的に信頼関係があり、お互いをよく知っているので、孤独が少なく問題があればみなで共有してきた。しかし、街で暮らすようになった若者は、新天地で新たにコミュニティを作り人間関係を構築していく。村出身と街出身では大きなギャップがあるため街の暮らしに溶け込むのに困難を強いられるかもしれない。また、兄弟が多いため、年下の兄弟の教育費や生活費を賄う必要があり、街で働いていても金銭的な困難はつきものである。それでも現金収入のために家族のいる村を出て、自分の世界を作っている。そして、結婚観では、最近では家庭を持ち、子供には十分な教育を与え将来の選択肢を与える必要があると考えるため、結婚には慎重になりつつある。教育費が高いため、必然的に将来望む子供の数も少なくなっている。このように教育の機会が得られるようになった村人は、勉学に勤しみ、街での生活の不安定さなどにより若いうちは家庭を支えることが困難なため、交際相手がいても結婚には簡単には進まないようだ。そんな村を離れた若者たちも、クリスマスや米の収穫祭であるカアマタンの時期には休暇を取り戻ってくる。そこでは暖かく家族や親戚が出迎えてくれて、いつでも帰ってこられる村があり、その重要性を感じるのである。このようにブアイヤン村で暮らしてきた若者の家族観や結婚観が変化しつつあるが、そこに困難を感じながらも街で力強く暮らしているようだ。

第二次世界大戦期のボルネオ島

——サンダカンの悲劇「サンダカン死の行進」をめぐる

張ミン赫

1. はじめに

第二次世界大戦の最中、特に太平洋戦争が始まってから、日本の東南アジア進出への意欲は増々現実的であらわになった。このことは、元オーストラリア兵のディック・ブレイスウエイト氏の息子リチャード・ブレイスウエイト氏の証言でも詳しく述べられている。彼の証言によると、ディック・ブレイスウエイト氏は、イタリアが枢軸国に加わったことをきっかけに、1940年7月に入隊し、1年ほど経った1941年8月にオーストラリア陸軍部隊第8師団が駐留するシンガポールに送られた。送られてすぐには戦闘に参加せずに済んだが、日本帝国陸軍第25軍がマレー半島を南下したことで、交戦を始め、1か月ほどで撤退を余儀なくされた。「日本軍は中国の戦闘で鍛えられていて本当に強力な軍隊でした」と述べたところから、当時日本軍とマレー守備の最前線を任されていたオーストラリア部隊の戦闘経験の差は圧倒的であったと思える。途中、他の英帝国軍部隊による援軍があったが、訓練が十分でなく、戦闘機の数も少なかったがゆえにシンガポールは陥落した。オーストラリア兵を含め、その末8万人もが日本軍の捕虜となって、その一部はボルネオ島の捕虜収容所に送られた。

本稿では、ディック・ブレイスウエイト氏の戦時中の足跡を追いながら、また一方で、東南アジアにおいてオーストラリア人捕虜の犠牲が最も大きかった、この「サンダカン死の行進」と同時期に、敗走を続けた日本軍の兵士による「ボルネオ死の行軍」と呼ばれた密林地帯横断の足跡も追うことで、第二次世界大戦中の戦地で敵味方の双方の若者たちが陥った苦難を検証する。

2. オーストラリア・日本・ボルネオ合同慰霊祭

後でより詳しく述べるが、ディック・ブレイスウエイト氏はサンダカン捕虜収容所に送られ、サンダカン死の行進から生き延びた6人のうち1人である。彼の自伝的著書『Fighting Monsters (モンスターとの闘い)』の中で、「サンダカンの悲劇に関わる人々は、相互の癒しのために日本人と共に慰霊を行う必要がある。(中略) 生存者と加害者グループのメンバーが共に集くことで、相互の癒しと和解が促進される。また、部外者の存在も助けになる。その集い(慰霊祭)に参加するという事は、承認、共感、支持を表明することである。慰霊祭は、包括的なつながりと前向きな未来へのヴィジョンを示すものでなければならない」と述べたことから、その後様々な努力が続けられ、2023年7月31日、川崎市の総持寺にて初めての合同慰霊祭を開けるようになり、このことは『「死の行進」加害・被害の立場超えて日豪の遺族ら初の合同慰霊祭』と朝日新聞でも取り上げられた。合同慰霊祭は「WW II Family Healing - Programme in Japan (7月31日～8月1日)」の一環として実施され、海外からの参加者はサンダカン死の行進の生存者のビル・モクシャム氏の息子のリチャード・モクハム氏、同生存者のディック・ブレイスウエイト氏の遺族、そしてマレーシアのサバ州からサンダカンの悲劇で祖父を含む7名の親族を亡くしたシンシア・オング氏と配偶者、同じく遺族でイギリスからの参加者を含む9人が参加した。日本からは、戦時期日本軍に所属し、ボルネオ島での死の行軍の生存者である上野逸勝氏の遺族と、同時期第37軍司令官を務めた馬場正郎氏の遺族を含む約10人が参加した。慰霊祭では上野逸勝氏、ディック・ブレイスウエイト氏、そして今回の合同慰霊祭に集った人々の繋がりがや慰霊祭にあたって様々な努

力を続けた古井貞熙氏やシンシア・オング氏のインタビューや降矢美枝氏のインタビュー動画を視聴して、ディック・ブレイスウエイト氏と古井貞熙氏の功績と貢献を顧みること、互いに語り合う中で和解と癒しを試みる事が主な目的であった。慰霊祭当日の7月31日の夕方には横浜港で火花を観覧し、次の日の8月1日には古井貞熙氏の墓参りを、夕方にはすみだ郷土文化資料館などを訪問し、日本文化と日本での戦争経験をも伝えて、日本・オーストラリア・ボルネオの民間人交流と相互理解を深める努力がなされる中で、プログラムを終わらせた。

3. 「サンダカン死の行進」とは何であったか

ディック・ブレイスウエイト氏は、所属していたオーストラリア陸軍部隊第8師団が駐留したシンガポールで、日本軍の南下により撤退を余儀なくされ、シンガポールで日本軍の捕虜となりサンダカン捕虜収容所に送られてから、サンダカン飛行場の建設において、すなわち彼の息子リチャード・ブレイスウエイト氏の証言によると、蘭印と日本の間の中継基地としての2つの滑走路を持つ巨大な飛行場の建設において使役されるようになった。捕虜は酷暑の中でつるはし及びシャベルを使い作業し、建設場の捕虜の監視員は、初めは日本人の軍属が、途中からは台湾から軍属を募集して監視した。当時のサンダカン捕虜収容所の所長は作業の管理者としては有能で、労働条件が悪くない状態で工事は順調に進んだが、ジェームス・テイラーやライオネル・マッシューズなどを筆頭に収容所での地下活動が展開され、やがてはラジオやライフルなどを手に入れ、最終的には8人が収容所からの脱走を敢行した。日本軍は脱走した8人以外にも約200人を逮捕、その中にディック・ブレイスウエイト氏はいなかったが、この事件をきっかけにオーストラリア人捕虜に関しては、食料が減られ、厳しい扱いをされることになる。このような状況で、死の行進が始まった。

1944年10月から米軍がサンダカンを攻撃し、死の行進が始まる前ですでに、滑走路の修復作業に動員された捕虜が死に、1月からは捕虜への食糧支給が止められ、わずかの米は残ってはいたが、1月末の1回目の死の行進の前にすでに大勢の捕虜が死を迎えた。1回目の死の行進では、約450名の捕虜がラナウに向かい（サンダカン・ラナウ間約260キロ）、ラナウでは米を運ぶ作業に使役される。リチャード・ブレイスウエイト氏の証言によると、1回目は日本軍と作業に動員する体力のある捕虜の移動、2回目では捕虜の移動より日本軍の移動を目的とした。捕虜への食糧供給が止められたが、捕虜たちは食糧の運搬役で使役され、最初は捕虜たちの間で何日間も持ちこたえる食糧が残っていると言われていたが、行進の途中になって日本軍にその残された食糧も没収されてしまった。そのような状況の中で、大木の倒れている地点で、誰もがその大木を登っているところで、大木の陰で監視員の視野から外れることに気づき、ブレイスウエイト氏は脱走を断行した。脱走したところ、別の木の幹に突き当たり、当時蔓延したマラリヤによる咳が出て、通りかかりの監視員に見つけられたが、もうすぐ自然死するだろうと思ったのか、監視員は何もせずに歩き去った。ブレイスウエイト氏は、その後には2、3日間密林の中をさまよい、北に向かう大きい川で地元の先住民に助けられた。この先住民が住む村に行ってから、以前に日本軍とトラブルを起こしてサンダカンから逃げ、この川沿いに住む先住民ダヤク族に助けられて村に居住していた、唯一英語の話せるフィリピン人のラレット・パドアという人物の助けで、河口まで20時間ほど移動し、米海軍が頻りに行き来するリバラン島で米軍に救助され、フィリピン領のタウイタウイ島の米軍基地に移送され、8月8日に病院船でオーストラリアに帰還した。

4. 「ボルネオ死の行軍」とは何であったか

フィリピン領タウイタウイ島は、『北ボルネオ密林死の行軍600キロの真実——兵士の記録』の著者

上野逸勝氏が、所属する家村部隊とともに満州から東南アジアに移動し、初めて警備任務を果たした島でもある。1944年12月を前後して、アメリカによる攻撃が頻繁及び活発になったため、家村部隊は最初に到着したタラワカンからトモホボンへ、そしてフィリピンを脱出してボルネオ島のタワオに行くためにバトバトへ移動した。移動はすべて密林の中を歩いてなされ、継続的なマラリヤ発熱と必然的な大腸カタルなどの影響もあり、温存できる体力はあまりなかったと言える。タワオに到着しては、もちろんアメリカなどの敵の圧迫はあったわけだが、建物内で寝泊まりし果物などが出されたので、上野逸勝氏は、休養はすばらしく、よかったと述べている。しかしそれもまた短く、タワオからアピ（現在のコタキナバル）への600キロの死の行軍を始めることになる。行軍の目的はアピに位置する連隊本部に向かい、合流すること。死の行進では捕虜たちの食糧が没収されるなどの横暴がまかり通っていたが、日本軍の死の行軍においても同じであった。行軍が遅れる原因は荷物が重いからだということになり、特に食糧においては後に補給されると言い渡され、破棄処分となった。行軍はタワオからコヤ川、次にポト、ラナウ、そしてキナバル峠を超えてアピへ向かった。特にキナバル峠に進入する前のタンピアスからは、沢山の現地人に出くわす可能性があり、中にはスパイなどもいることで、5人以下で行軍しないように注意をされるほど危険でもあった。

厳しい行軍の末に、アピに到着してからは、P38とB29戦闘機による空爆、夜では艦砲射撃が続いた。上陸してくると思われる敵に備え、海岸線に照明を合わせて、構築された機関銃座のある陣地に入って構えるなど、警備はやっていたものの、激しい攻撃の中でやれることは灯火管制くらいであった。8月近くになると食糧入手が困難になり、一日のサイクルは、日中はタピオカ菜園作り、構築陣地の強化土木作業、日が沈むと陣地に入って構えることになった。敵の攻撃は増々激しくなる一方で、上野逸勝氏が、彼を含め7名しかいない中隊もマラリヤで苦労したなどと述べていることから、当時の状況を推測できる。8月になってからは、上野逸勝氏も病院に行かなければならないことになった。そして迎えた8月15日には爆撃や機銃掃射、艦砲射撃の音が聞こえなくなったと述べている。戦争の終わりを直感してからは、「行軍中に見た痛ましい俘虜の姿が眼の前に浮んで来て、明日の我が姿だ、敵の本国へ連行されるのか、或は此の地で重労働をさせられるのか。今まで戦ってきた敵として、又、俘虜虐待に対する徹底的な御礼返しをされるだろう。どう考えても悲観的な事柄で、話す声も小さく、じめじめしている」と上野逸勝氏が語り、彼の行軍と終戦の話は締めくくられる。

上野逸勝氏の著書から分かるように、ボルネオで「行軍」をせざる終えなくなった日本軍の部隊は他にも沢山あった。すべての大隊がアピに向かったわけでもなく、独立歩兵第454大隊は、最初タラカン島で警備をしていたが、その後南の方に行き、バリックパパンに上陸、スマヤン湖地帯まで作戦を遂行した。もちろん死の行進や行軍に比べると短い距離ではあるが、アピでの作戦以外にボルネオ島の南の方でも戦闘がなされていた。その戦闘においては、皇民義勇軍（朝鮮人）の44名が動員されたという記録もあり、サンダカン捕虜収容所の建設に動員された現地人や台湾人作業監視員以外にも、ボルネオでは様々な国籍の人々が動員されていたことがわかる。

死の行進によってサンダカン捕虜収容所からラナウまでの移動が漸行されていた同時期に、同じくサンダカンから死の行軍でアピに向かった独立機関銃第20大隊の『陣中日誌』には、作命第18号に依拠し1945年2月1日に、同月5日から陸路でアピに転進するよう命じられ、2月28日にはパパンに到着したが、道路の状態が非常に悪く、純粘土質山道にして雨後の行軍が相当困難であったと詳細に記録されている。

5. おわりに

第2次世界大戦期のボルネオに関する情報は非常に限られている。本稿で紹介した、オーストラリア

兵や日本兵の従軍記録以外に、当時の朝日新聞の記事では敵機や敵艦の出現及び敵駆逐艦撃退などが多く、死の行進や行軍に対する記事が書かれていないことや、特にボルネオに関しては資源地帯及びその重要性を主に扱っていることから、これは当時の朝鮮側の新聞でも多く見られる傾向であったが、社会において当時の戦況がどのように見えていたかが分かる。一方、オランダ軍情報機関である NEFIS では、救出した現地人や捕虜などを対象に審問した結果、その報告書が書かれているが、当時の日本の新聞で発表されていたことは逆に、当時のボルネオ及び周辺諸島でどのようなことが起きていたのかを詳細に記録されている。

勝者も敗者もなかった戦争末期のボルネオの密林の中で、密林をさまよった当時の若者たちと、生き残りトラウマに苦しんだ故ディック・ブレイスウェイト氏を含む生存者方の崇高な魂を称え、その意思を継ぎ合同慰霊祭を開催した遺族・関係者様に感謝する。そして、一次資料に依拠しながら、「サンダカン死の行進」及びボルネオに関わる真相をより詳しく記述することをこれからの研究の目的としたいと考える。